

＜クラウド実験教室第3回：奥越高原青少年自然の家、「雪の結晶観察」：令和8年2月14日（土）、

16：30～17：45 に実施＞

本クラウド事業「地域で作る小さな科学館」では、福井県内の4公民館と福井県の社会教育施設の“奥越高原青少年自然の家”の合計5施設と連携して事業を実施しています。

今回の「雪の結晶観察」は、奥越高原青少年自然の家が主催する“もりのアドベンチャースクール（1泊2日）”のプログラムの一部として実施されました。同施設は、大野市六呂師高原に位置（海拔約650m）しており、自然雪の顕微鏡観察には大変適したところですが、当日雪は全く降らず、代わりに人工雪を作った顕微鏡観察となりました。参加者は小・中児童生徒25名、ボランティア7名、当施設のスタッフ数名。ふくい科学学園から3名が実験指導者として加わりました。参加者は、最初スライドでNPO ふくい科学学園方式の人工雪生成法の原理および方法について説明を受けた後、実際に人工雪生成に取り組みました。雪と塩を混ぜてマイナス20度の低温の氷を作り人工雪生成容器に入れ、その上にプラスチックの板を貼り付けた金属製の蓋をのせました。生成容器の上部に取り付けた綿棒から、一定時間ごとに少しずつ注射器の先から水を送りました。今回、時間が少し短かったため、それほど良い形の人工雪はできなかったのですが、それでも参加者はプラスチック表面に出来た小さな雪結晶の観察を楽しんでくれました。



会場の奥越高原青少年自然の家の中央玄関（上の写真）



玄関ホールに実験テーブルを並べる（右の写真）



最初、スライドを使って、自然雪の結晶観察法や人工雪生成法について説明



4グループ（7班）に分かれて、実験の準備



雪（250g）と塩（115g）をよく混ぜて
マイナス 20 度の低温を作る



できた人工雪を、簡易ルーペ顕微鏡を使って観察する児童

